

---

# 三笠

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

三笠

### 【Nコード】

N0442E

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

保次郎は祖父に連れられて三笠に入る。その艦橋でたたずんできるとやって来た老人は。歴史をテーマにしました。

## 第一章

### 三笠

横須賀には一隻の戦艦がある。それは古い戦艦だ。

「これがその戦艦なんだ」

「ああ」

美濃保次郎の横には祖父の保正がいる。祖父は懐かしいものを見る目でその巨大な戦艦を見上げている。今二人はその三笠の前にいるのだ。

「日露戦争で活躍した。これは知ってるな」

「一応はね」

保次郎はこう祖父に答えた。答える言葉にはこれといって灌漑はない。

「まだ残っているとは思わなかったけれど」

「色々あつて残ったんだよ」

保正はこう孫に語るのだった。

「色々!？」

「水族館になったり麻雀の場所になったり」

「またそれは随分と色々あつたんだね」

保次郎は祖父の言葉を聞いて顔を顰めつつまた三笠を見上げた。

黒く巨大でしかもあちこちがゴツゴツしているその外観から水族館や麻雀を想像するのはかなり無理があつた。少なくとも彼には想像がつかなかった。

「どう思う?それは」

祖父は保次郎に顔を向けて尋ねてきた。

「それは」

「ちよつとね」

だが彼はその問いに戸惑う顔をするだけであつた。複雑な顔でいぶかしみ首を捻る。

「何て言えばいいかわからないよ」

「そうか、わからないか」

「まあ中に入ろう」

とりあえずは祖父にこう提案するのだった。

「今は。それでいいよね」10

「ああ、最初からそのつもりだ」

保正もそれに応える。そしてまずは自分から三笠のラッタルに足をかけるのだった。

「足元に気をつけるよ」

「何で？」

「何でも何も」

気をつけると言われてキョトンとした顔になる孫に顔を向けてまた言う。

「不安定だからだよ。知らないのか」

「軍艦に入るのってはじめでだし」

「そうだったか。はじめてか」

彼は今の孫の言葉に気付いた。そういえばそうなのだ。

「この船の中に入るのも」

「だからここに来たんだよ」

彼は祖父に続いて先に進みながら答える。やはりラッタルは普通の昇りに比べていささか不安定だ。彼は慎重に足を進めながら祖父に言葉を返すのだった。

「どんなのを見てみたくてね」

「ずっと横須賀に住んでおるのにのう」

「こんな船があるってことも知らなかったよ」

こつも祖父に答えた。

「つい最近までね」

「だったら余計によかったな」

保正は孫の言葉をここまで聞いてあらためて思うのだった。まさかここまで知られていないとは思ひもなかったのだ。

「ここに来たのは」

「一応ネットとか図書館で調べはしたよ」

保次郎も言う。

「日露戦争の頃の戦艦だよな」

「ああ、そうだ」

ラッタルを進みながら孫のその言葉に頷く。

「日本海海戦だな。旗艦だったんだよ」

「百年以上昔の船なんだ」

もうラッタルは終わりに近付いている。間近で見るとその黒い身体はさらに大きくなっている。まるで海の上に浮かぶ要塞である。

「そのわりには新しいね」

「整備しているからだよ」

ここで船の中に入る。船の中も百年前の船とは全く思えない内装だ。しかも軍事的色彩もかなり薄まったものになっている。所謂記念館になっている。

「それなりにな。それでも」

「それでも？」

「本当に訳のわからない使い方をされてきた」

彼はその艦の中を進みながら保次郎に話をする。孫はその後について来るだけだった。

「考えられるか？日露戦争に勝った時の船だぞ」

「うん」

「それが水族館や麻雀の場に使われるなぞ」

「またどうしてそうだったの？」

二人は展示室に入る。そこには様々な当時の資料が置かれている。パノラマ模型や日本海海戦の資料が保次郎の目に入った。その中で話をするのだった。

「戦後にな。何もかも」

保正は忌々しげに首を横に振って語る。

「そうなってしまった」

「所謂平和主義ってやつだね」

「この横須賀でも」

そうした団体は多い。自衛隊が何かするとすぐに出て来る。彼等の不思議なところはこの街にはあるならず者国家の工作員もいて自衛隊より遥かに好戦的な行動に従事しているのだがそちらには文句をつけない。いささかアンバランスな平和主義に見受けられる。

「それはあつて」

「今でもだよ」

これは保次郎も知っていることだった。横須賀ではそれこそそうした団体は何時でも見られる。ついでに言えば右翼も見られる。

「それは」

「かなり減ったがな。それでもな」

保正は日露戦争の資料のところに来て言う。自然と保次郎も彼について行く。

「いるな、まだまだ」

「まあ僕はあの人達も好きじゃないけれど」

何となくだ。騒いでいるあの様子が好きになれないのだ。

「けれどもこうしたところもね。あまり」

「興味がないのか」

「今一つわからないんだよ」

日露戦争のその資料を見てもぼんやりとした言葉であつた。

「本当に大変だったのか凄かったのかも。全然」

「それはな」

祖父はそんな孫の姿を見て仕方ない、といった顔を見せてきた。

何故か達観したふうになっていた。怒ってはいなかった。

## 第二章

「今にいれば当然だろうな」

「そりやお爺ちゃんはあるだよな」

祖父に顔を向けて言う。日露戦争のところは見えていない。

「戦争を知ってるんだし」

「ああ、よくな」

その戦前に生きた人間なのだ。もう少なくなってきたいるが。

「この街でよく海軍の軍艦を見ていたよ」

「長門とかそういうの？」

「立派だった」

顔を上げる。そうして感慨の深い顔になるのだった。

「国の為に戦つてな。今では色々言われてるが」

「それはね。仕方ないよ」

その感慨に対する孫の言葉は実に素っ気無いものだった。

「負けたんだし」

「それだけか」

「うん、それだけ」

やはりこの返事も素っ気無いものだった。

「負けたから。仕方ないじゃない」

「そう言ってしまえばそれまでだよ」

顔を下ろしてまた言うのだった。

「結局な」

「僕にはわからないんだよね」

保次郎はまた言った。

「こついうの見ても。戦争にしる」

「知らないか」

「テレビとかゲームでだけ」

現代日本の若者らしい言葉であった。それがよいのか悪いのかは

ともかくとしてそれが現実であつた。やはり戦争を知らないのである。

「まあ最近のロボットアニメでは変な戦争のものもあるけれどね」

「あの白いロボットのか」

「幾ら何でも一人の人間があそこまでやつたり数機でどうにかできるとは思えないけれど」

その程度の知識も分別も彼にはあつた。そもそもそんなおかしなアニメができること自体が戦争を知らない何よりの証拠である。だがそれに気付かない者もいるのだ。

「それでも。やっぱり」

「それも。仕方ないな」

保正はあらためて呟く。ここでも達観が見える。

「実際に経験したわけじゃないからな」

「見たら一応は大変な状況だつたんだつてわかるよ」

三笠のそこにある資料は少なくとも学校の教科書のそれとは違う。日本を断罪するのではなく公平に見て資料が作られている。それはかなり真つ当な内容であつた。

「それでも。やっぱり」

「そうか。わからないか」

「悪いけれどね。それでさ」

保次郎はまた言つのだつた。

「お腹空かない？」

「さつき食べなかつたか？」

「育ち盛りだから」

悪戯っぽく笑つての言葉だつた。

「何かまたお腹が空いてきたんだ」

「やれやれ、困つた奴だ」

そう言つがここで彼は言つのだつた。

「出るまで我慢してくれ」

「食べ物はないんだ」



「ジューズならある」

こう言葉を返す。

「それで我慢できるか？」

「そんなのじゃ我慢できないよ。仕方ないなあ」

それを聞いて彼は決めた。彼にとつてはいささか苦しい決断だが。

「諦めるよ。ここを出てからでいいよ」

「おお、今日は聞き分けがいいな」

「そっちの方が美味しく食べられるしね」

空腹は最高の調味料というわけである。とりわけ今の保次郎の年代ならば誰でもそうである。彼とても例外ではないのだ。

「だから。我慢するよ」

「それならいい。さて」

保正は展示室にあるものを全て見終わってから孫にまた声をかけるのであった。

「ここは終わったし次は何処に行くか」

「艦橋には行けるかな」

保次郎は不意に祖父にこう尋ねてきたのだった。

「その絵に艦橋が描かれているけれど」

「ああ、あれだな」

保次郎が指差したのは一枚の油絵であった。そこには海軍の軍人達が描かれている。それもまた三笠の絵であった。

「あの絵ってここの艦橋のだよね」

「そうだよ。あそこに行きたいのか」

「絵に描かれているからね」

興味を持ったのだ。そういうことであった。

「だから。どうか」

「それはいいことだな」

祖父は孫のその提案を聞いてにこやかな笑みになる。そのうえでまた言うのだった。

「いい場所に気付いた」

「そこまで言うんだ」

「当たり前だ。あそこが一番大事なんだからな」

彼にしてみればそうなのだ。それを孫にも告げる。

「あそこで指揮を執ったしな」

「真ん中の小さいお爺さんがだよ」

「待て」

孫の今の言葉には顔を顰めさせた。

「何が小さいお爺さんだ」

「だって本当に小さいじゃない」

彼は何も知らないといった調子でまた祖父に言葉を返した。

「偉い人なんだろうけれど」

「あの人が日本海海戦を勝利に導いた人なんだぞ」

「あの人が！？」

「そう」

強い声で孫に説明する。

「その名も。書いてあるだろ」

「うん、それもかなり」

三笠の展示室だから当然である。その名は。

「東郷平八郎か。昔の名前だね」

「それだけか？」

「うん、それだけ」

またしてもあつさりと特に感慨も入れずに答える。そこには何の悪気もない。しかし思い入れもまたないのは確かなことであつた。

「戦争を勝たせた人なのはわかつたよ」

「当時の情勢は？」

「それもね。一応は」

わかつてはいる。しかしそれでも感慨も思い入れも湧かないのであつた。

### 第三章

「あるつもりだけれど」

「やれやれ。困ったことじゃ」

「実感ないから。それはそうとさ」

「ああ、わかつている」

困った顔であるが頷くのだった。こうして次の場所に向かう。

「行くぞ、艦橋にな」

「うん」

「その絵に描かれている場所にな」

ようやく行くことになったのであった。

「やっとだね。それじゃあ」

「一応言っておくが天井はないからな」

それはもう絵にも描かれている。この当時の戦艦の艦橋はそうだったのだ。後の戦艦や今の軍艦では艦橋も完全に建物の様になっているが当時は違ったのだ。

「雨は。大丈夫だが」

「流石に今日は降らないよ」

快晴である。それこそ雲一つない。

「幾ら何でもね」

「そう。だからここに来たし」

保正は言う。

「そういうことだな」

「鳥のウンコが落ちて来たら嫌だな」

「それはよける」

今度は保次郎が素っ気無く言い返された。

「戦争をしていてそんなことは言っていられなかったぞ」

「また随分と大変だったんだね」

こういうことは実感する保次郎だった。

「鳥のウンコはよけるしかないなんて」

「砲弾も当たるぞ」

もっと怖い言葉が出て来た。

「戦争だとな」

「あつ、そうか」

「そうかで済むのか」

どうしても実感を感じない保次郎であった。保正の言葉がまたしても呆れたものになる。

しかし呆れてはいても。彼は言うのであった。

「まあいい。とにかく行くからな」

「さつきから結構言ってるけれど」

「御前があれこれと言うからだろっが」

逆にこう言い返された。

「わかつたらな。早く」

「わかつたからそれじゃあ」

「全く。本当に困った奴だ」

最後にはこんな愚痴も出た。長い話の後で展示室を後にして艦橋に向かう。艦橋の上は雲一つなくそこから綺麗な海も横須賀の街並みも見渡せる。遠くには灰色の自衛隊の軍艦さえ見えた。

「凄くいい景色だね」

「普通に見てもいい場所だ」

保正の目が細いものになっている。どうやら心からこの場所が好きらしい。

「絶対に一度はここに連れて来たかった」

「そうだったんだ」

「暫くそこで色々と見ているといい」

不意にこう言ってきた。見れば今艦橋にいるのは彼等二人だけだ。

「わしはちよつと」

「何処に行くの？」

「トイレだよ」

少し気恥ずかしい顔になつての言葉であつた。

「もよおしてきてな」

「何だ、トイレだったんだ」

「すぐに歸つて来るけれどな」

「うん。じゃあそれまでの間は」

「景色でも楽しんでおけ。ついでに色々考えてな」

「考えるねえ」

それにはまた首を捻る。今の彼にはどうしてもであつた。

「何を考えても一緒だと思ふけれどね」

「そう言わずに考えるんだ」

祖父としての言葉であつた。

「わかつたな。それもじつくりとな」

「わかつたよ。じゃあここににいるから」

「ああ。トイレが終わつたら戻つて来るからな」

そう言つてからトイレに向かう。保次郎は一人だけになつた。一人だけになるとただ空や辺りの海や街中を見ているだけだつた。それなりに奇麗で氣に入る光景であつたがそれだけだ。彼はどうしても考えることがなくぼんやりと景色を眺めているだけであつた。それだけだつた。

しかしその彼のところに。一人の男がやつて来た。

「あつ、誰か来たな」

彼は最初こう思つただけであつた。

「誰かな、一体」

「おや、若い人か」

やつて来たのは小柄な老人だつた。白い髪に髭をしておりその顔つきは温厚そうなものである。にこにこ笑つていてその服は和服であつた。

「最近若い人がまた増えてきたな。何より何より」

「！？ここによく来られるんですか？」

「左様」

老人は保次郎のその問いににこにことした笑顔のまま頷いてきた。

「ここはな。わしにとつては懐かしい場所だな」

「懐かしいって」

「あれじゃよ」

また言つてきたのであつた。

「何度もここには登つたさ」

「何度もですか」

「それこそ何度もな。飽きることのなく」

「飽きなかつたんですか」

「いい光景じゃろ」

まずはこう言つてみせてきた。

「遠くまで見えるし。しかも見栄えがいい」

「まあそうですね」

見栄えがいいというのは保次郎も同意だ。彼も気に入つてはいるのだ。

「見ていると」

「どうしたくなるかの」

「そのまま遠くまで行きたくなるような感じですね」

彼はこう答えた。これは偽らざる本音だった。横須賀に住んでい  
るせいか昔から海には慣れ親しんでおり好きであるのだ。

「ずっと遠くまで」

「海はいいものじゃ」

老人はまた彼に言つてきた。

「綺麗だな。しかし」

「しかし？」

「波が高い時もある」

「ああ、それはそうですね」

これは横須賀に住んでいるからわかる。海というものは決して穏  
やかなだけではない。時として荒れ狂うこともある。これはよくわ  
かつていたのだ。

「何かあつたらすぐに荒れますよね」

「そうじゃ。あの時も」

「あの時も？」

「天気は晴れていたがのう。波は高かつたんじゃ」

語る老人の目が細まる。細まりはするのだがそこにある光は強いものだった。保次郎はそのこんとらすとに気付いて不思議な感じを憶えた。

「あの」

「ここに来たから日本のことは知っておるな」

老人は保次郎が問う前に逆に彼の方から問い返してきた。

「まあ少しは」

「少しでも知っているのと知っていないのでは大違いじゃ」

保次郎に語りながら海に顔を向ける。今横須賀の海は静かに落ちて着いている。

「海でも。何でもな」

「何でもですか」

「何も知らないで騒ぐ者達程困つたものはない」

老人の目が今度は憂いのものになる。どうやら何かあつたようだ。保次郎もそれを察した。

「あの、何か」

「日本のことも」

老人の今の言葉には憂いが込められていた。

「何も知らないで言うのは困つたものじゃな」

「それはそうですね」

これには保次郎も同意だった。実のところ彼は市民団体というものが好きではない。かといって右翼も好きではないがああした市民団体に関しては本能的に胡散臭いものも感じている。何故市民だというのに先頭を行く者達の服装に一定の法則があるのかも気になっていた。不思議なことに私服であるというのにそこには一定の法則があるのだ。それが何故かは彼もわかつてはいないが。

「あの時の日本は大変だった」

「今よりもですか」

「一歩間違えなくても潰れていた」

老人の言葉はこうであった。



## 第四章

「ロシアが来ていたからな」

「当時は日本よりずっと大きな相手だったんですよ」

「大きいどころではない」

老人は首を小さく横に振って彼に答えた。

「それこそ。日本なんぞは鎧袖一蹴じゃった」

「一蹴ですか」

「そう、一蹴じゃ」

老人の言葉にはまるで当時に生きている人の酔うな説得力があった。保次郎は彼の会話と表情からそれを読み取ったのであった。

「簡単にな。潰せる様な存在じゃった」

「それが日本に向かおうとしていたんですよ」

「危なかった」

老人は今度はこう述べた。

「本当にな。朝鮮まで来ておったし」

「そうしていよいよ日本に」

「迷ったわ、誰も」

これは本当のことであつた。誰もロシアに勝てるとは思えなかった。陸軍の首魁である山縣有朋でさえも。彼も最後の最後まで躊躇していた。明治天皇に至つては間違いなく敗北すると考えておられた。これは帝が臆病でも日本を卑下しておられたのでもない。帝は日本とロシアの力の差を見て冷静に判断されたのだ。しかしそれでも。日本は戦わないわけにはいかなかったのだ。そして日本は戦争を選んだ。

国民にしる戦争すべきと主張していたがそうそう勝てるとは思っていなかった。彼等とて愚かではないのだ。ましてや相手はあのロシアだ。ロシアへの恐怖はそれこそ骨身に滲みている。そうした存在を向こうに回しての判断であつた。追い詰められていたのだ。な

おこの戦争は出征した弟を想う与謝野晶子も支持していたしどういうわけか資本家といった存在をけなす癖のあった夏目漱石も支持していた。ほぼ誰もが支持していた戦争である。やるしかなかったのだから。

「しかし。わし等は戦った」

「戦われたんですね」

「そうじゃ」

ここで保次郎は気付かなかった。老人の言葉に。話に引き込まれてしまっていたが故に。

「引くことは許されない。負けることも許されない」

「そんな戦争だったんですか」

「戦わなければならない時もある」

よく使われる言葉であろうがこの時もそうだったのだ。

「それで戦った」

「そういう状況だったんですか」

「誰も好き好んで戦いはせぬ」

この言葉もまた非常に重いものになっていた。そこには背負っている者の重みがあった。

「しかし。戦うからには勝たなければならぬ」

「そうですね。それは」

「それで戦った。必死にな」

「必死にですか」

「誰もが。それぞれの責務を果たした」

死んだ者も多い。しかしそれは無駄死にはなかった。彼等は果敢に戦い、そうして死んだのだから。守るべきものの為に。

「そしてその最後にな。陸で奉天があり」

「海ではあの」

「左様、日本海での戦いじゃ」

この三笠の最大の見せ場であった。ここで勝たなくては本当に日本はなかった。

「あの戦いに負ければ」

「日本はなかったんですか」

「その通り、わかってくれているんじゃない」

老人は保次郎の言葉を聞いてまた目を細めさせた。そのことが何よりも嬉しいらしい。

「左様左様、本当になかった」

「あの言葉ですよね」

展示室で見たあの言葉をここで思い出したのであった。

「皇国の興廃この一戦にあり」

「その言葉のままじゃった」

老人はその言葉を全て肯定するのだった。また真剣な顔に戻って。

「あの戦いで負ければ日本はなかった」

「今の日本は」

「そう。あの戦争は有色人種がはじめて白人に勝利を収めた戦いと言われたが」

これもまた教科書では書かれないことが多い。そもそも何故がこの戦争自体が日本の侵略戦争になっている。実態は全く異なる。ロシアに対する防御戦争だった。あの戦争をしなければ日本がロシアになっっていた可能性は高い。少なくとも当時の日本人達はこのままでは確実に日本はロシアになっってしまう、そう危惧していた。日本はかなり深刻な状況下に置かれておりその中で戦ったのである。

その戦争への勝利は確かにそうした一面がありこれに勇気付けられた様々な人種が奮い立った。しかし当時の日本はそんな意識はなかった。ただ生き残る為に戦ったのである。それだけだったのだ。

「実際そこまでは考えておらんかった」

「そこまではですか」

老人もそれに言及し保次郎も聞いていた。

「うむ。生きたかっただけじゃ」

「それだけだったんですか」

「皆。生きたかった」

語る老人の目が暖かく慈愛に満ちたものになった。

「それだけだったんじゃよ。あの戦争は」

「それで。勝ったんですね」

「必死に戦ってな。それだけだったんじゃ」

「それで勝ちましたね」

見事なまでに。この海戦だけではない。日露戦争全体として奇跡的な勝利であった。ロシアにとってみればそれは単なる局地戦であつたろう。しかし日本にとっては全てを賭けた戦いでありそれに勝利を収めたのだ。これを『勝ったことになっている』と貶めている輩がいるがこれは卑しい所業である。こうしたことを言う輩にはおそらく歴史を語る資格なぞないであろう。当時の日本人のことを何一つ知らないからである。

「何とかな。それで今の」

「僕達がいるんですか」

「結果としてはそうなる」

老人は保次郎のその言葉を認めて頷いてみせてきた。

「しかしあれじゃぞ」

「あれ？」

「それを誇るつもりはない」

老人はそれは否定した。

「誇るつもりはな。しかし」

「それを忘れてはならないんですね」

「戦争を否定することは容易いのじゃ」

これはもう言うまでもない。嫌だ、と一言言えばそれで全ては終わる。だがそれで何かが解決するかといえ否なのだ。否定するだけでは解決はしない。

「しかし。そこから何かを学び取ることこそが」

「大切なんですか」

「だからこの三笠が残っているんじゃよ」

老人は語りながらにこりと微笑んだ。その顔には見事な徳が浮か

び出ていた。

## 第五章

「この船がな。わかつてくれるかの」

「はい」

保次郎はまた老人の言葉に頷いた。

「そういうことなんですね」

「左様。ではわかつてくれたのならいい」

「有り難うございます。それで」

今度は保次郎から老人に声をかけた。

「この船はこのままずっとここにいてくれるんですね」

「皆が望む限りな」

そう保次郎に答えるのだった。

「ずつとな。おるよ」

「そうですか。ずつとですか」

「この船は日本と共にあった」

日露戦争の後大正になり昭和になり。戦乱や混乱もあったがそれでもここに留まり続けた。そのまま日本の歴史の一つになっているのだ。

「それはこれからじゃ」

「僕達がこの船を知っている限り」

「この船だけではない」

これはすぐに老人によつて訂正された。

「歴史を知っている限り。だから」

「はい」

今度はすぐにわかった。今何を言うべきか。

「学んでいきます。日本のことを」

「当時の日本だけでなくな。皆必死じゃったということ」

「そうですよね。それを忘れません」

「頼むぞ。わしはもう何もできんが」

今浮かべた笑みもまた暖かい笑みであつた。何もできないとはいつても寂しいものではなかつた。実に暖かいものであつた。

「それでも。見ているからな」

「見ていて下さい。それできつと」

「日本をな」

「任せて下さい」

「その一言が欲しいのじゃよ」

この言葉こそが彼が望んでいるものであつたのだ。その笑みがさらに暖かいものになる。それが何よりの証拠であつた。

「皆がそう思つてくれれば」

「いいんですね」

「わしは信じておるよ」

やはり言葉には憂いも嘆きもない。

「今の日本人も。わし等と変わらないと」

「それは」

「いや、わしは知つておる」

それは否定しようとする保次郎の言葉こそを否定した。

「それもな。だから」

「いいんですか」

「うむ、信じておるから。だから頑張つてくれよ」

「はい、僕達も必死に」

「わし等のことを忘れないでな。それでは」

不意に老人の格好が変わつた。それまでの地味な和服が消えそのかわりに濃紺の詰襟の服になつた。腕先の袖には金色の巻きがある。

「またな。縁があれば会おう」

「はい、また」

「何も卑下することも何も否定することもない」

老人の姿は消えていく。その中での言葉であつた。

「何もな。全てあるがまま受け入れて考えてくれ」

「はい」

「それだけでいい。後は頑張ってくれれば」

「この船も日本も」

「残ってくれる。それを見せてもらうぞ。あちらでもな」

それが最後の言葉であった。老人の姿は消えた。丁度その老人と入れ替わりに保正が艦橋に戻って来たのであった。

「あれ、誰かいたのか」

丁度老人が消えたところであつた。保次郎の言葉も聞こえていたのでこう問うたのだ。

「うん、ちよつとね」

「もう帰つたのか」

「別のところに行つたよ」

こう保正に答えた。

「別のところにね」

「そうなのか。どんな人だつたんだ？」

「お爺ちゃんもよく知つてる人だよ」

保次郎は悪戯っぽく笑つて祖父に述べるのだった。

「よくね」

「わしもか」

「そうだよ。とてもね」

「誰なんだか」

保正は話がわからなくなっていた。それで孫の話を聞いていて思わず苦笑いを浮かべたのである。

「わからんわ。さつぱり」

「だから知つてるんだけれどね」

それでも保次郎は笑つて言う。

「まあいいよ。僕にもわかつたから」

「僕には、じゃないのか」

つまり人ではないのかと。こう問うたが答えは変わらなかった。

「そう、僕にもだよ」

「ふむ。それでも何かわかつたんだな」



「うん、よくね。これからさ」

彼はあらためて祖父に対して言うのだった。

「何かと大変なことがあるだろうね、日本も」

「それは当然だな」

祖父は孫のその言葉に静かに頷いた。

「何時だつて大変さ。この船が活躍した頃は特にそうだったけれども」

「それがわかつたんだよ。だから」

微笑む。そのうえで言葉であつた。

「僕も頑張るよ。僕なりに必死にね」

「ほう」

孫のその言葉を聞いて。驚いた表情になる。だがそれは一瞬のことですぐににこやかな笑みになってまた言葉をかけるのであつた。

「いいことを言うじゃないか。だがな」

「言葉だけじゃなくだよな」

「そう。動くことが大事だぞ」

「わかつてるよ。じゃあ僕はこれからの日本の為に」

「頑張れ。いいな」

「僕なりに必死にやるよ」

爽やかな笑みになる。その笑みで見るのは海の彼方だった。

「これからの日本の為にね。あの人達と同じで」

「応援してるぞ」

保正もまた孫と同じ海を見ていた。かつて運命をかけて戦士達が出て行った海を。その海は何処までも青く清らかに澄んでいる。その海を眺めながらの言葉であつた。

2  
0  
0  
8  
.  
2  
.  
1  
3

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0442e/>

---

三笠

2010年10月8日15時04分発行